

第19回 盛岡市民演劇賞 観客賞投票結果



投票受付期間: 令和3年4月1日(木) 9:00～令和3年7月11日(日) 21:30まで

投票総数: 10票(うち有効票数10票)

最低投票数20票に満たなかったため、盛岡市民演劇賞実施要綱第5の(2)―観客賞投票要領に基づき観客賞は不成立となりましたことをご報告いたします。

公演団体	公演名	獲得票数	推薦理由
劇団SummerSummer	水平線の歩き方	3票	◇感動した
			◇主演二人の演技に惹きつけられました。
			◇短い上演時間だったのにそれを感じさせない内容の濃さ。
カンザスハリケーン	水曜小台風	2票	◇毎週水曜日に15分程度の一人芝居を2本、定員10人。時にはゲストを呼び、時には京都の劇団員とリモートで連動し、時には同じ作品を違う演出家出演者で競演…11月から3月まで、小台風は次第に周りを巻き込んでハリケーンを呼ぶようだった。 ある演出家はその酔狂をよしとし、たった一度だけの舞台に目の覚めるような演出を打った。一人芝居の緊張感に加えてゲスト陣への演出稽古など、週に1度の舞台のためにどれだけ準備をしてくれたのだろう。 京都1人盛岡2人の劇団がやった規模は小さいが澄んで深い志のある舞台だった。
			◇斬新な試みで楽しませて頂きました。一回しか見れない作品もあり、とても贅沢な時間でした。いくつかの作品が実は繋がっていたと言うのも良かったです。
ボーイズドレッシング	底ノ町奇団	2票	◇私たちはいつも何かが始まりそうな、そして全てが終わりそうな時代に生きていて、けれどもそれが何かは掴みきれない。 どこかで起きている事件や出来事を情報としては知りつくしているけれど、大抵はどれに対しても自分は当事者ではなく、その人間が本当はどういう人であったか知ることはない。 この作品は、私たちは結局、何も知らないまま生きているという「時代がもつ傷」を描いた作品である。 コロナ禍において、演劇がおとなしさを求められる中、人が生きているというのは、ただすべてをわからないまま、それでも生きていくことなのだ実感させてくれたキャストの声や汗、息を押し殺し整えながらタイミングを見計らっているスタッフの熱い手触りが伝わる音楽や照明。 ああ、そうだ、生身の人間がそこにいる、それが演劇だった。 私たちはなぜ演劇が捨てられないのか、演劇でなければならないのか、それを示した作品だったと思う。
			◇無邪気に「楽しかった」と言えるテイストの作品ではなかった。無邪気に人にオススメできる作品でもなかった。むしろ邪気というか、ふつつつと湧くような毒気が終始漂っていたのに、その邪気や毒気を気持ちよく浴びせられた。観終わった後の奇妙な清々しさが忘れられない。
岩手大学劇団かつぱ	Blue Light Under End	2票	◇なんだかよく分からないんですけど、卒業する、新しい時代になるという彼らの事情を、さりげなく小粋な程度にあしらいながら、幻想的で言葉の一つ一つが丁寧に描かれていて、なんだろう、面白かったんです。
			◇心が洗われるような作品だった。
もりげき八時の芝居小屋 第170回 演劇ユニットせのび公演	踊るよ鳥ト少し短く	1票	◇L字型の客席、タウンホールの高さを活かした縦方向のアクティングスペース、印象的な小道具や照明、などなど、観客の目を引くための洗練された小技が光っていた。